

# 森は先人からの預かりもの

## 「安房大神宮の森」守り 育み 次世代へ

縄文時代からの先人に学び、山と人が永続的に付き合うモデルの森にしよう。自然環境の再生に取り組みNPO法人「地球守」の高田宏臣さん(54)が千葉市若葉区で、安房神社(館山市大神宮)の周辺に広がる森で「安房大神宮の森」プロジェクトを始めた。同志を募りながら古道や水場、集落を再生し、次世代に手渡す取り組み。土地に合った再生に向けて地域の歴史などを学ぶ連続講座も開催。第1回が27日、オンラインで開かれる。(山本哲正)

### NPO法人・高田さんがプロジェクト

高田さんは2019年の房総半島台風で荒れた沖ノ島(館山市)の再生を指導し、21年に「館山森づくり大使」に任命されている。昨年夏、大神宮の森に風力発電開発業者による土地買収の動きがあると聞きつけると、森を守るために賛同

者として株式会社を設立。今年1月にこの土地約55畝を取得した。「購入はしたが、所有する考えはない」と高田さん。「預かり、育み、未来に手渡す。『いつか』の預かりもの」です。山林は、館山市と南房総市の境に広がり、国道41

0号が整備されるまで住民が使われたとみられる無数の山道があったことが、元のNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の調査で分かっている。山奥には水場が点在し、田んぼも入り組んでいた。江戸期まで

は、安房神社に仕えた百敷が目立つが、大神宮の森は

十人が自給自足の生活をしてきたとみられる。かつての山道や水場を再生していき、地域の災害対策としても期待される。豊かな山となれば、栄養分が運ばれる海も豊かになる。「近年、全国で山の荒廃が目立つが、大神宮の森は498へ。



大神宮の森の魅力を語る高田さん(いずれも館山市で)



### 活動拠点「縄文小屋」

カンカン、シャツシャツ。のみを入れる音、木の皮を鎌で削ぐ音が、大神宮の森に響いた。23日は、石斧で丸木舟などを作る「縄文大工」の雨宮広さん(55)が山梨県甲州市で講師に招き、活動拠点となる縄文小屋を建てる準備を有志30人で進めた。22日に用地を切り開くところから始め、26日までに1棟を仕上げた。

### 大地に戻っていく材料で

さんには「古道には泥水が周囲に流れて荒れることのないよう石を差し込んだ跡があった。建物も同じで泥水対策をする。その土地にあり、その土、大地に戻っていく材料で造る。土地を荒らさずに暮らす環境を整え、次世代に渡すのが本来の在り方」と強調する。

### 鳥獣の暮らしにも配慮

隣にいた雨宮さんが「すべて

歩くたびに山の神気に打たれ、これほどの山河が残っていることに感動する。どう現代に生かし、守りつなぐか。風土の豊かさを取り戻した「世界的モデル」となるよう進めていきたい」と高田さんは語る。

雨宮さんが石川県能登町の国史跡「真脇遺跡」で手がけた縄文小屋は能登半島地震でも無傷だった。遊びのある造りが免震を果たしているのも特徴だ。自然との付き合い方を体得している先人が学ぶのがプロジェクトのコンセプト。高田

さんは「古道には泥水が周囲に流れて荒れることのないよう石を差し込んだ跡があった。建物も同じで泥水対策をする。その土地にあり、その土、大地に戻っていく材料で造る。土地を荒らさずに暮らす環境を整え、次世代に渡すのが本来の在り方」と強調する。

隣にいた雨宮さんが「すべて



# 「天神宮の森」でフォーラム

館山

## オンラインで全国の130人に配信

館山市の安房神社の周囲の森に、縄文時代に由来する道や集落などを再現して次の世代につなぐ取り組み「安宮の森 風土・歴史



対談で参加者らと語る両宮さん(右)ら=館山

フォーラム」が27日に開催された。関係者約40人が集まった館山市の館山野鳥の森多目的ホールから、事前に申し込んだ全国の約130人にもオンラインで配信された。

最初にプロジェクトの代表で、館山市の「森づくり大使」を務める高田宏臣さん(54)が、構想の内容やこれまでの活動を報告。館山市と南房総市をまたぐ約55分の森にはかつて集落が点在し、人々が自然と向き合いながら農耕などを行っていたことを紹介し、通り道や集落を復元して自然や野生動物とともに暮らす環境をつくること

房日新聞 2024.4.28付

で、人間の心の豊かさを取り戻したい、と訴えた。続いてプロジェクトの運営委員会に加わっている同市のNPO法人「安房文化遺産フォーラム」共同代表の池田恵美子さんが「逆さ地図から見る安

宮の地」と題して講演したのに続き、高田さんと池田さん、26日間で5日間にわたり森の中で行われた企画「縄文集落&縄文小屋をつくろう！」で棟梁(と

うりよう)を務めた「縄文大工」の両宮国広さん(55)が対談。人間の共有物としての森を守り、育てて次の世代へ受け継いでいくことの意義と、広くコストを負担してプロジェクトを支えることへの理解と協力を呼び掛け

た。関係者らはフォーラムの後、実際に森の中に足を運び、豊かな自然が残っている状況や、プロジェクトの一端で高田さんらが一般参加も呼び掛けて復元している縄文時代の道や掘っ立て小屋の様子を見学した。



# 「縄文集落&小屋をつくろう！」

## 館山の「大神宮の森」の参加者募り今後も月1回開催

館山市の「大神宮の森」で、縄文時代の小屋や集落を再現する企画「縄文集落&縄文小屋をつくろう！」が行われている。26日まで、期間中、関東地方を中心に関西や東北などから延べ約180人が作業に参加する。

豊かな自然が残る安房神社周辺の森を次の世代につなぐ活動に当たる市民団体「安房大神宮の森」が、JOMO Nさんの愛称で親しまれる山梨県在住の元宮大工で「縄文大工」を自称する雨宮国広さん

竹やぶを切り開いて整地した長さ約8メートル、幅約4メートルの区画に直径約20センチ、深さ約60センチの柱を立てる穴を12カ所掘る。そこにスギやヒノキ、竹を資材にして小屋を建てる。

代表の高田さん(54)は今回の取り組みについて、「土地に負担をかけない暮らし方、人間が忘れてしまった暮らし方を実践したい」と話す。今後毎月1回程度、参加者を募り、徐々に道を延ばし、森の各所に同様のつくり方で小屋な



参加者らと木材を加工する高田さん(右手前)と雨宮さん(中央)＝館山

年、石川県能登町の真協遺跡で今回と同様のつくり方で縄文式の

「この建物は、今回の能登半島地震の揺れにも無傷だったことから、地元で驚きの声が上がったという。雨宮さんは今回の取り組みに賛同した理由について「全ての生き物が幸せになる暮らしづくりという趣旨は、私が目指しているものと一緒に」と話す。今後も自分の活動の合間に大神宮の森に足を運んでプロジェクトに関わるといふ。

今回のイベントでは、参加者から参加費(一般で1日7000円)を募った。材料の実費や昼食代、保険代その他、森を維持、管理するコストをみんなが負担し合い、広く森を共有するための。今後も、森を整備するさまざまなイベントを実施する計画で、高田さんは費用負担への理解と多くの参加を呼び掛けている。



# 「大神宮の森」を次世代に

27日

## 館山のフォーラムで理解呼び掛けへ NPOなど

館山市の安房神社の周囲に広がる大神宮の森に、縄文時代に由来する古道や集落などを再現し、次の世代につながるという計画が、4月から動き出した。この活動に取り組むNPO法人などがつくる「安房大神宮の森」プロジェクト運営委員会」が、取り組みの内容を広く知ってもらうためのフォーラムを、27日午前10時～正午にオンラインで開催する。定員500人。

参加者を募集している。無料だが、活動資金を応援する1000～5000円の寄付つきチケットもある。希望者は専用フォームから申し込み。計画の中心になってるのは、千葉市の造



園設計事務所の代表取締役などを務める高田宏臣さん(54)。環境土木の専門家として2021年から館山市の「森づくり大使」に委嘱されている。「安房大神宮の森」プロジェクトを立ち上げ、代表に就いた。

計画では、55畝に及ぶ大神宮の森の中に、縄文時代に由来する道の痕跡に沿って通り道を復活させ、集落や棚田を再現。森に生息する野生動物と人が共存する森を再生する。道などを整備する木材や石などの資材は最大限、森の中で調達する。今回、対象とする森は、高田さんが賛同者と設立した会社に対して銀行の融資を受け、1月に買い取った。このため、整備作業に当たっては1回当たり数千円を「整備協力金」として参加者に負担してもらおう。銀行への返済や整備資金、固定資産税などのコストを理

解者たちで広く支え合い、長い将来にわたって共有する仕組みをつくりたい考えた。27日は、プロジェクトや活動の内容を高田さんが説明した後、「逆さ地図から見る安房の地」をテーマに同市のNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の愛沢伸雄、池田恵美子両共同代表が講演。さらに高田さんと愛沢さん(090-6479-13498)へ。運営

呼び掛ける。高田さんは「大神宮の森は『安房発祥の地』といわれ、文化的な価値が埋もれている。このプロジェクトを通して多くの人の共有財産として守る仕組みをつくりたい」と話す。申し込みなどの問い合わせは、安房文化遺産フォーラムの池田さん(090-6479-13498)へ。運営

委員会は今後もテーマを変え、同様のフォーラムを連続して開くことにしている。